

京都の散歩道 (7)「竹取物語」と八幡竹



今月は表紙に写真を載せた「中秋の名月」にちなんで、「竹取物語」と「竹」を話題にします。まず、近刊でスザンヌ・ルーカスさんの面白い本⁽¹⁾を見つけました：著者は

World Bamboo Organization (<https://worldbamboo.net/>) のExecutive Directorで、「竹がかかわる物語のなかでもっとも有名なものが、日本の『竹取物語』だろう。10世紀頃に成立し、現存する日本最古の物語とされるこの説話は、竹のなかから見つかった不思議な少女の生涯を題材にしている。(p.116)」と紹介しています。「竹取物語」は、日本が世界に誇ることができる昔話のようです。

そこで、何十年かぶりに「竹取物語」⁽²⁾を読んでみました。「そうか、最後は帝までがプロポーズしたのか」と思い出すと同時に、日本人とりわけ京都人と関わりの深い竹に思いが移りました。竹に関する本を検索すると、古くは京大教授だった故上田弘一郎(1898-1991)先生の本⁽³⁾⁽⁴⁾、新しくは大阪市大教授だった内村悦三(1932-、やはり京大農学部出身)先生の本などに多数行き当たります。文献⁽³⁾によりますと、身長3寸=約9cmのかぐや姫が入っていた竹は「マダケ」だそうです(今日一般に見られる「モウソウチク」は中国から1730年代に伝わったので該当しないとのこと、pp.86-91)。一方、かぐや姫の里はどこでしょうか？ 文献⁽⁴⁾によりますと、一説には西京区大原野竹林、もう一説には富士市中比奈だそうです(pp.77-88)。とはいっても、帝からのプロポーズの一件を含め、京都人としては前者を取りたい気持ちです。

竹と言えば、京都人なら思い浮かぶもう一つのことにはエジソンでしょう。石清水八幡宮の竹(八幡竹)をエジソンが白熱電球のフィラメントに採用したということは右図⁽⁵⁾のサイトなどにも説明されていますが、今回、前述のルーカスさんの文献⁽¹⁾中に比較的詳しい説明を見つけたのと、男山エジソン頌徳保存会の貴重な資料⁽⁶⁾を国会図書館で入手できたのことで、長文になりますがご紹介します。以下の本文は前者⁽¹⁾からの引用、脚注は後者⁽⁶⁾に基づく補足です。



<http://www.iwashimizu.or.jp/story/kj.php?seq=14&category=0>

「竹はその独自の細胞構造により、ほかの重要な用途にも利用されている。たとえば、最初に特許が取得された電球は、竹の炭化フィラメントを使っていた。長持ちする炭素フィラメント電球を開発し、近代史の方向を大きく変えた人物こそ、アメリカの有名な発明家トーマス・エジソンである。エジソンは1879年、32歳のときに、タールとすすを塗った炭化綿フィラメントを使い、白熱電球の製造に成

功した。だがこれは、45時間しかもたなかった。600時間以上もたなければ売り物にはならない。そう考えたエジソンは、世界各地からフィラメントに使えるような素材を6000種以上集め、その有効性をひとつひとつテストしていった。そんなある日、研究室にいた東洋好きの男が持ってきた竹の繊維を試してみたところ、そのフィラメントは200時間もった。そこでエジソンは、竹のテストを集中的に行おうと考え、世界中の竹を取り寄せることにした¹。電球のフィラメントに最適の竹を求め、20人以上の研究者がさまざまな国に派遣された。そのために10万ドルを超える費用が投じられたという。19世紀末の当時としてはかなりの額である。

1880年、エジソンのもとで働く研究者のひとり、ウィリアム・H・ムーアが日本にやって来た。当時の首相伊藤博文と外務大臣山縣有朋に面会し、京都へ行けばいい竹があるかもしれないとの情報を得たムーアは、早速京都へ向かい²、明治新政府の約2代京都府知事榎村正直に話を聞いた。すると、嵯峨野や八幡の竹が電球のフィラメントに適しているかもしれないという。

実際、八幡で採取したマダケ（学名 *phyllostachys bambusoides*）製のフィラメントで電球をつくると、2450時間ももちこたえた。エジソンは、エジソン・ゼネラル・エレクトリック・カンパニーを設立して八幡の竹³を使った電球の製造に乗りだし、10年余りにわたり世界中にこの電球を輸出した（1894年により耐久力のあるセルロース製フィラメントの電球が開発され、竹の炭化フィラメントの時代は終わった）。その功績により、日本ではエジソンは「発明王」として知られ、石清水八幡宮がある男山の山頂にはエジソンの記念碑が設置されている。（pp.96-97）」

参考文献

- (1) Susanne Lucas(スザンヌ・ルーカス)、竹の文化誌、原書房、(2021)
- (2) 長尾剛、竹取物語 すらすら読める日本の古典<原文付き>、汐文社(2018)
- (3) 上田弘一郎、竹と日本人、NHKブックス、(1979)
- (4) 上田弘一郎、竹づくし文化考、京都新聞社、(1986)
- (5) <http://www.iwashimizu.or.jp/story/kj.php?seq=15&category=0>
- (6) 立下三郎、Thomas A. Edison and Japanese Bamboo、(1989)、非売品。
男山エジソン頌徳保存会(現京都男山エジソン協会：事務局は京阪・石清水八幡宮駅前カフェ・キャンドル、立本信氏)

編集人

¹ エジソンは細かく指示しています：①肥料の施していない竹 ②8年から10年経た竹 ③秋10月から12月に収穫したもの ④根から1m上部12節を取る ⑤節と節の間隔は35cmから40cmのもの ⑥竹の内側の柔らかい部分をはがし ⑦1cmの幅にして100本の束にまとめて

² 東海道線の新橋駅—神戸駅間が全通したのは1889年なので、1880年夏にムーアは船で横浜から神戸に移動したようです。神戸のアメリカ領事館を訪れる途中、街の扇子屋に飛び込み「この扇子はどこで作っているか」と聞くと「京都、三条の宮脇賣扇庵 <http://baisenan.co.jp/>」とのことだったので、京都に着くや宮脇賣扇庵を訪れたものの英語が通じません。そこで、知事の榎村正直が仲介に入ったのがきっかけのようです。

³ 正確には、現在の嵯峨野から大山崎にかけての竹藪と、八幡市から京田辺市普賢寺(同志社大の南端付近)にかけての竹藪から集められたそうです。